＊人間の歴史は「普遍暴力」の原理に貫かれている。

約一万年前に人類に**食糧革命(農業革命)**が生じた。⬇ **食糧と財をめぐる普遍戦争**(そうだつせん)が開始された。

「普遍暴力」とは、動物の世界のような生来の体力の差によらず、「策略」(machination)と数を集めるという方策によって強弱の、つまり、支配・被支配の秩序を決定する力のことである。

言語ゲームによる

ホッブス

暴力原理と相互不安(不信)　暴力を縮減するための規範＝ルールによる社会秩序の創設

せめぎ合い

普遍戦争

相互不安の解消、つまり強力な統治権力(国家)の設立こそが戦争抑止の根本条件であると説いた。

●人間が、他者たちとの共存の世界を生き、関係的な善への意志と努力を持続できるのは、ただ、暴力と戦争の威力から自分たちを防衛している間だけである。(ウクライナ)

●人類にとって戦争と死の威力が避けがたいものとなって以来、普遍暴力との対抗、あるいは普遍暴力の縮減という課題こそは、人間生活の根本条件となった。

普遍暴力との対抗・縮減の方法は、**言語**による共同的なルーを形成すること。

人間の文化的、幻想的制度性の一切が生じてきた。

世界説明

まず宗教……「物語」を使う。

次に哲学……概念・原理、再展開……時間の中でより普遍的な説明(**普遍洞察**)へと変成しつづける。

自然哲学……測定技術の発達……自然科学へ

○ギリシャ哲学は、その後のヨーロッパ哲学の全域にわたる三つの根本主題(認識論、存在論、価値の哲学)を確定する。

「世界説明」としての宗教と哲学の功罪

○宗教は、聖なるものの威力によって**共同体に根本的なルールを与え、そのことで暴力契機の縮減を試みる。**

さらに「**物語**」によって「世界の意味」を教えて、生の苦しみに耐える力を人々に与える。

✖宗教の物語(教義)は、共同体がぶつかり合うところでは対立や戦いの原因となる。

○哲学は、概念、原理、再展開(再始発)という方法によって、宗教、民族、文化の限界を超えて普遍的な「世界説明」の創出のゲームとなる。

✖概念の論理的使用は、どんな結論をも論理的に導く帰謬(きびゅう)論法(詭弁論)を必然的に生み出す。

★**普遍洞察**をめがける哲学には、形而上学と相対主義(懐疑主義)という「鬼子」がつきまとう。そしてここから、哲学の「認識問題」がその固有の難問として現われる。⬇「本体」は、認識できるか、できないかのいずれかである。

●普遍洞察の方法はわれわれの理性的な判断に働きかけ、物語の方法は、われわれの感情と心情に直接働きかける。